Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2003, Vol. 50, 243 − 250.

青年期後期の目的のある集団に対する態度について

── 集団で過ごすために重要なことを手がかりに ──

難　波　久美子[1)]

問　題

青年期には，公的な集団活動を行うようになる（宮下，1995）。特に青年期後期では，クラブ・サークル活動やアルバイト，ボランティア活動など，青年期前期・中期のような学級内のグループ活動とは異なる，目的に基づいて形成された集団に参加・所属するようになる。それでは，集団内での対人関係を青年はどのように捉えているのであろうか。

青年期の対人関係のうち，友人関係の様相を扱った研究では，友人関係を捉える軸として，人とのかかわり方に関する姿勢（深い－浅い）と，自分が関わろうとする相手の範囲（広い－狭い）という2軸が提案されている。そして，青年期前期から後期にかけて，かかわり方は深く，関わる相手の範囲は狭くなっていくことが指摘されている（落合・佐藤，1996）。また，現代青年の特質として，群れ的な関係を求める傾向が指摘されており，こういった傾向を持つ青年は，深刻さを回避し，友人と一緒にいること，楽しく過ごすことを求めているという（岡田，1993）。このように，青年期の友人関係を扱った研究において，集団，つまり人数的な規模が大きいつきあい方は，発達段階的には早い段階でのあり方を示していたり，親密な内面的に深い関わりができないために，集団で過ごしていたりするという，ややネガティヴな扱われ方をしているといえよう。これらの研究では，青年期には，親友という自己形成に関わる特徴的な関係が現れることに重点がおかれているためと考えられる。

しかし，実際の生活上では，親友との関係だけが存在しているわけではなく，多くの青年は公的な集団活動に参加している。親友との関わりは1対1の関わりであるが，そのような関わり方が，1対複数の関わりである集団活動でも全く同じとは考えにくい。複数の人間との関係が同時に存在する集団の中では，集団でのつきあい方が存在していると考えられる。

集団への参入過程では，集団への同一化がおこると考えられており，集団に受け入れられるように，人はその集団の中にあるルールを進んで受け入れようとする。集団の持つ魅力が高い場合により顕著な同一化が起こる。集団の魅力は，共通の目標が明確で関心が一致していること，そして，対人的・情緒的な交流が存在していることが含まれている（土肥，1988）。これらの要因を集団の持つ機能から捉えると，大まかに，目標達成機能と集団維持機能（吉田，1997）として捉えることができる。集団へ加入する時点では，提示された，これらの機能が働いた結果（例えば，クラブ活動での目標達成機能の成果として，試合の結果が示されていたり，集団維持機能の成果として，年間に開かれるコンパの回数が紹介されていたりする）から判断されることが多い。提示された結果を判断するのは加入時点での期待に合致するかどうかである。しかし，一旦集団に加入すると，その結果に至るまでのプロセスが評価されると考えられる。つまり，現在起こっているプロセスで結果に行き着くことが可能かどうかが判断されると考えられる。また，このプロセスの評価は，各個人の集団経験によって培われているであろう。そこで，集団で過ごしていく上でどのようなことが重要であると認知しているかについて検討する。このことにより，青年期における集団内での活動や対人関係に対する態度を検討する。

そこでまず，青年期後期において，集団で過ごしていく上で重要であると考えていることを探索的に検討する。また，それまでの集団経験を反映していると考えられる集団観を収集し，対応させて検討する。なお，集団観を収集するにあたっては，一般的に目的のある集団に対して用いられている“仲間”について説明を求めた。また，本研究では，目的を持っている公的な集団に注目するが，青年期の友人研究では，群れているようなつきあい方が指摘されている（岡田，1993）。そこで，項目選定の際は目的を持った集団，というように制限を加えた。

1）名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究生

目　的

以下の3点を検討することで，青年期における目的のある集団に対する態度を探索的に検討する。①目的のある集団で過ごす時にどのようなことが重要であると捉えられているのか，探索的に検討する。②パターンを検討する。③クラスタに含まれている人の“仲間”についての記述特徴を検討する。

方　法

調査内容　①項目収集　心理学関連の授業を受講している専門学校生，92名（男性11名，女性81名，平均年齢21.60歳，SD＝3.43）に「何かの目的のもとに集まった，複数の人間が含まれているグループでのつきあい方で，気をつけなければならないと思うこと」について，できるだけ多く記述するよう求めた。調査用紙は，心理学関連の授業中に担当講師により一斉配布・回収された。実施後，調査内容の説明を口頭で行った。調査は2003年6月に実施された。記述された内容は，1人平均2.10個であった。②尺度の構成　これらの記述をもとに，集団で過ごすためのルールを測定する尺度（20項目）を構成した。③仲間観　仲間とは何か，友だちや親友との違いを明確にして説明するよう求めた。

調査対象　専門学校生，短期大学生，大学生405名（男性197名，女性207名，性別不明1名）に回答を求めた（平均年齢18.80歳，SD＝1.51，年齢不明3名）。

調査方法と調査時期　心理学関係の講義時間中，または，講義終了後，担当の教員によって実施・回収された。実施後，調査内容の説明を文書で配布した。調査実施時期は，2003年7月である。

結　果

1. 因子分析結果

主因子解による因子分析[2]の結果，因子の解釈可能性から，3因子解が妥当であると考えられた。各因子に負荷の低い項目を削除して主因子解，promax回転による因子分析を行った結果をもとに，各因子の解釈を行った。第1因子には「自己中心的な行動をしない」，「わがままを言わない」などの項目が高いパターンを示していた。この因子は，集団から外れ，単独で勝手な行動をしないことに関する因子であると考えられたため，「自己中心的行動の抑制」因子と命名した。第2因子には，「他の意見とどこが違うのか比較しながら話す」，「納得できないときは徹底的に話し合う」などの項目が高いパターンを示していた。この因子は，何か問題が起こった時に，話し合いによる納得を重視していることに関する因子であると考えられたため，「話し合い重視」因子と命名した。第3因子は，「必要以上に話さない」，「意見をまとめて話すように心がける」などの項目が高いパターンを示していた。この因子は，集団内に存在しているが，集団内での表出行動を抑制し，集団に影響を与えないようにすることに関する因子であると考えられたため，「過度の影響回避」因子と命名した。因子間相関係数は，「自己中心的行動の抑制」因子と「話し合い重視」因子，「過度の影響回避」因子それぞれと $r=.27$ の低い値を，「話し合い重視」因子と「過度の影響回避」因子で $r=.07$ のほぼ無相関の値を示していた。各因子に含まれる項目と回転後のパターン行列をTable 1に示す。

次に，各因子の内的整合性を吟味した。それぞれの因子ごとに α 係数を算出した結果，「自己中心的行動の抑制」因子では，$\alpha=.79$，「話し合い重視」因子では，$\alpha=.69$，「過度の影響回避」因子では，$\alpha=.69$ の値が得られた。やや低いが，分析に耐えうる内的整合性を保持していると判断し，下位尺度とした。下位尺度得点は，各因子に含まれる項目の項目得点の平均とした。下位尺度得点の平均，標準偏差，α 係数，下位尺度間相関係数をTable 2に示す。

2. 調査対象者の分類

下位尺度得点を尺度ごとに z 得点を用いて標準化し，その得点を変量としてクラスタ分析（平方ユークリッド距離に基づくウォード法）を行ったところ，3クラスタを得た。各クラスタに含まれていた人数は，クラスタ1が171名，クラスタ2が96名，クラスタ3が131名であった。次に，標準化された下位尺度得点ごとに分散分析を行った。その結果，「自己中心的行動の抑制」では，1％水準で有意（$F(2,395)=71.08$，$p<.01$）であった。多重比較（Tukey法）の結果，クラスタ2，クラスタ1，クラスタ3の順に得点が高く，いずれも1％水準で有意な差が見られた。「話し合い重視」では，1％水準で有意（$F(2,395)=197.02$，$p<.01$）であった。多重比較（Tukey法）の結果，クラスタ2，クラスタ1，クラスタ3の順に得点が高く，いずれも1％水準で有意な差が見られた。「過度の影響回避」では，1％水準で有意（$F(2,395)=147.49$，$p<.01$）であった。多重比較（Tukey法）の結果，クラスタ2，クラスタ3，クラスタ1の順に得点が高く，いずれも1％水準で有意な差が見られた。クラスタごとに標準化された下位尺度の平均値と標準偏差，分散分析の結果をTable 3に示す。また，各下位

2）本稿の統計的分析はすべてSPSS（Ver. 9.0）によって処理された。

Table 1　プロマックス回転後のパターン行列

項目番号	項　目		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
【自己中心的行動の抑制】					
11.	自己中心的な行動をしない		.87	.06	−.13
9.	わがままを言わない		.80	−.01	.01
18.	一人で勝手な行動をしない		.71	.16	−.05
5.	輪を乱すような行動を慎む		.66	−.14	.22
【話し合い重視】					
13.	他の意見とどこが違うのか比較しながら話す		−.08	.78	.17
17.	納得できないときは徹底的に話し合う		−.10	.75	−.18
20.	意見の違いをみんなが納得できるように調整する		.12	.62	.03
7.	自分の意見が伝わるように表現を工夫する		.05	.51	.18
10.	話し合って納得してから行動する		.33	.51	−.12
【影響回避】					
2.	心要以上に話さない		−.18	−.08	.79
3.	意見をまとめて話すように心がける		−.15	.32	.70
4.	でしゃばらない		.32	−.13	.68
14.	自分を出しすぎない		.13	.04	.65
	因子間相関	Ⅱ	.27		
		Ⅲ	.27	.07	

残余項目

1. グループの中で浮かないようにする
6. どうしてもあわないと思う人とはあまり接しないようにする
8. がんばっている人の前で簡単にあきらめない
12. 言葉遣いやあいさつに気をつける
15. 個人の秘密を守る
16. みんなにどんな印象を与えているかに気をつける
19. みんなに合わせる

Table 2　下位尺度得点の平均値，標準偏差，α係数

		平均値	標準偏差	α係数	下位尺度間の相関係数 自己中心的行動の抑制	話し合い重視	過度の影響回避
自己中心的行動の抑制	合計	3.93	.73	.79	−		
話し合い重視	合計	3.52	.59	.69	.35**	−	
過度の影響回避	合計	2.90	.74	.69	.33**	.17**	−

** $p<.01$

尺度についてのクラスタごとの平均値を Figure 1 に図示した。

得点の特徴は，以下の通りである。クラスタ1では，「話し合い重視」得点が高く，「過度の影響回避」得点が低い。すなわち，集団内で，何らかの意見の相違がある時には話し合いで解決する姿勢を持っており，そのことにより影響を与えることを回避しない。クラスタ2では，「自己中心的行動の抑制」，「話し合い重視」，「過度の影響回避」得点がいずれも高い。集団から外れてもいけないし，集団の中で出すぎてもいけない。それでいて，話し合うことも重要であると捉えている。クラスタ3では，どの得点も平均を下回っている。特に「自己中心的行動の抑制」と「話し合い重視」得点は低い。集団から離れた行動を取ることを認め，話し合って納得することを重

要視していない。

また，各クラスタに含まれる男性・女性の人数について，χ^2検定を実施した。その結果，人数の偏りは有意であった（$\chi^2(2)=8.03$, $p<.05$）。そこで残差分析を行った結果，クラスタ1に女性が多く，クラスタ3に男性が多かった（Table 4）。

3．仲間観記述

各クラスタに含まれる青年は，どのような仲間観を持っているのか，記述の分析を行った。クラスタ1では，情緒的な内容が含まれる記述が多く，一緒にいて楽しい，一緒にいると落ち着く，といった，集団全体で一緒にいることで得られる情緒面に注目されていた。

クラスタ2では，自分を高めてくれる，利害関係が一致しているといった道具的に捉えている記述や行動面の共有に注目する記述が多かった。

クラスタ3では，友だちと変わらない，人が集まっていると集団である，集団でいると疲れるといったものな

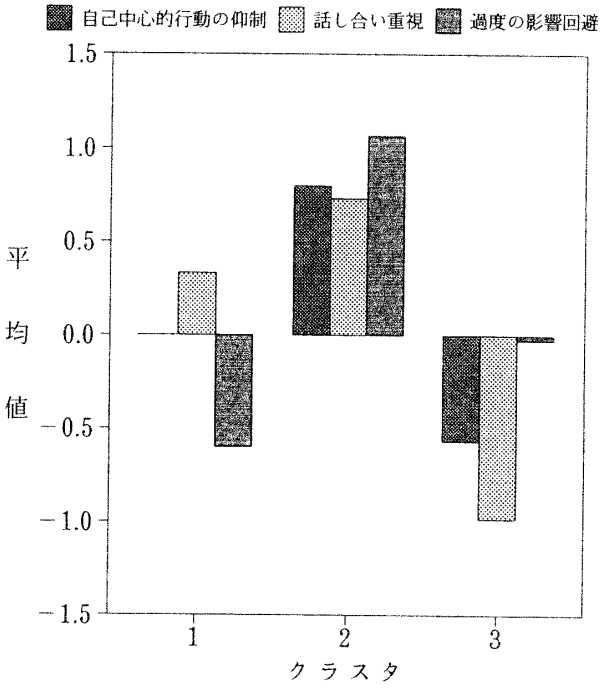


Figure 1　クラスタごとの平均値

Table 3　標準化された下位尺度得点の平均値，標準偏差，分散分析結果

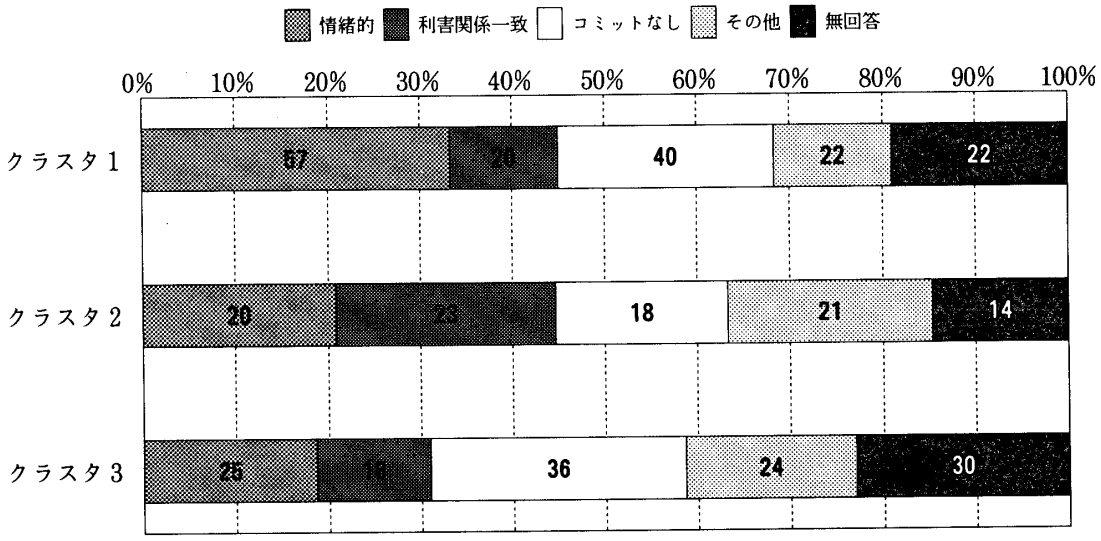
下位尺度名	クラスタ	平均値	標準偏差	F 値
自己中心的行動の仰制	*1*	.00	.82	71.08**
	2	.80	.52	
	3	−.58	1.08	
話し合いの重視	*1*	.34	.73	197.02**
	2	.73	.64	
	3	−.98	.74	
過度の影響回避	*1*	−.58	.78	147.49**
	2	1.08	.61	
	3	−.02	.84	

** $p<.01$

Table 4　クラスタ内の男女別人数と残差分析結果

			性別 男性	性別 女性	合計
クラスタ	*1*	度数	73	98	171
		調整済み残差	−1.97*	1.97*	
	2	度数	43	53	96
		調整済み残差	−.80	.80	
	3	度数	76	54	130
		調整済み残差	2.81**	−2.81**	
合計		度数	192	205	397

** $p<.01$　* $p<.01$



（グラフ内の数値は分類された記述数）

Figure 2　仲間観記述

Table 5　仲間観記述例

クラスタ	記　述　例
1	いたら楽しいやつら。いつでもあそびに出れる人。 いっしょにいてたのしい人。 いろんなことを話しあえる。いっしょにいてたのしい。 きのあう友達。 決して裏切れない存在である。信用・信頼できる友達。一緒にいて落ちつけるグループ。人として必要なまとまり。 自分の考えが似ていたり，どこか近親間（親近感？）がある集団。 楽しい軍団!! 楽しく遊んだり，いろいろ相談したり，スポーツなどができる集まり。
2	自分がどんな人間かを気づかせてくれる存在。自分を高めてくれる。 自分にとって仲間とはいないと生きていけないものだと思います。仲間がいるからいろんな人との接し方ができるんだと思います。 自分をいろんな方向に成長させてくれる人達。全く逆の性格の人も含めて，自分にいろんな事を学ばせてくれる人達。 必要最低限助け合う関係。 利益を共有できる単なる集団。 利害関係が一致した人。または話のあう人。 お互いに刺激し合える人達が仲間だと思う。同じ目的・目標をもって頑張ることができる。 大切です。仲間の意見を聞いて自分を見直すということが何度もあります。…
3	あまり，友人などとかと区別がつかない。 いっしょにいることに意義があるもの。 同じ時間を共有することができる。 同じ時間を共に過ごす人。 様々な形で出会い，様々な事を共にし，一生涯を通じて関わる共同体。 自分にとって仲間とは，友達や親友とおなじようなもの。 互いを理解する，しないにかかわらず，できるかぎり多く持ち，一緒にいるときに楽しくしていられればいい。 他人に自分にはこんなに友達がいるんだぞ！と見せつけるモノ。

ど，集団に対してコミットメントが少ない記述があった。各クラスタ内でカテゴリに分類された記述数を Figure 2に，代表的な記述を Table 5 に挙げる。

考　察

1．結果のまとめ

本研究では，目的のある集団で過ごすために重要なことについて記述を収集し，得られた記述をもとに尺度を構成した。因子分析により，「自己中心的行動の抑制」，「話し合い重視」，「過度の影響回避」という3つのほぼ独立した因子が得られた。分析に耐えうる信頼性係数が得られたため，下位尺度とした。

これらの下位尺度について，各個人内のバランスを明らかにするために，クラスタ分析を行った。その結果，3クラスタが得られた。この3クラスタは，「自己中心的行動の抑制」，「話し合い重視」，「過度の影響回避」それぞれの尺度得点のパターンが異なっていた。クラスタ1は，集団内で，何らかの意見の相違がある時には話し合いで解決する姿勢を持っており，そのことにより影響を与えることを回避しない。つまり，積極的に集団に関わろうとするクラスタであると考えられた。クラスタ2は，集団から外れてもいけないし，集団の中で出すぎてもいけない。それでいて，話し合うことも重要であると捉えている。つまり，集団の雰囲気を壊さず留まっていることに努力を傾けているクラスタであると考えられた。クラスタ3は，集団から離れた行動を取ることを認め，話し合って納得することを重要視していないことから，個人のしたいようにすることが優先されるクラスタと考えられた。

次に，各クラスタ内で，仲間について説明した記述を検討した。クラスタ1では，集団全体で一緒にいることで得られる情緒面の安定に関することに注目されているようであった。クラスタ2では，仲間を道具的に捉えている記述や行動面の共有に注目する記述が多いかった。クラスタ3では，仲間に対して強いコミットが示されない記述が多かった。

2．目的のある集団で過ごすために重要なことの3側面について

因子分析の結果，「自己中心的行動の抑制」，「話し合い重視」，「過度の影響回避」という3つのほぼ独立した因子が得られた。これらの因子について，集団の機能という点から考察したい。大きく分けると，集団の機能には，①目標達成機能と②集団維持機能がある。①目標達成機能は，集団機能の社会―操作的側面であり，②集団維持機能は，社会―感情的側面である（吉田，1997）。

まず，「自己中心的行動の抑制」は，「自己中心的な行動をしない」，「わがままを言わない」といった，集団のために自分を抑えて振舞うということに注目した内容である。このことから，社会―操作的な側面に近い内容であると考えられる。しかし，同時に「輪を乱すような行動を慎む」という内容も含まれている。そのため，集団の輪を乱さないように自己中心的な行動をしない，というような，社会―感情的側面が含まれている可能性もある。

「話し合い重視」では，「他の意見とどこが違うのか比較しながら話す」，「納得できないときは徹底的に話し合う」といった，何らかの問題解決や自己主張が必要な状態での行動内容が含まれており，社会―操作的側面に近いと考えられる。

「過度の影響回避」は，「必要以上に話さない」，「意見をまとめて話すように心がける」という振舞い方に注目した内容である。一見，社会―操作的な内容にも取れるが，「でしゃばらない」「自分を出しすぎない」という内容を含んでおり，集団が全体としてのまとまりを維持することに注意している。このことから，集団維持機能と近い側面であると考えられる。

さらに，因子間相関では，「自己中心的行動の抑制」と「話し合い重視」，「過度の影響回避」のそれぞれとは弱い相関があった。しかし，「話し合い重視」と「過度の影響回避」の間にはほとんど相関はみられなかった。このことから，「自己中心的行動の抑制」は，社会―操作的な側面と，社会―感情的な側面を併せ持っていることが示唆されよう。

ところで，本研究で収集された項目群は，積極的に集団に働きかけるといった内容は少なかった。むしろ，フォロワーとして集団を構成し，少なくとも集団を崩壊させるような行動をしないように，最低限気をつけるという消極的な側面を示していると考えられた。

3．分類された調査対象者の特徴について

各クラスタの下位尺度得点パターンと，仲間についての記述を併せて，クラスタに分類された調査対象者の特徴を検討する。

クラスタ1に分類された調査対象者は，集団内で，何らかの意見の相違がある時には話し合いで解決する姿勢を持っており，積極的に集団に関わろうとするクラスタであると考えられた。そして，仲間の説明は，集団全体で一緒にいることで得られる情緒面に注目されたものであった。このことから，クラスタ1に含まれる調査対象者は，お互いに情緒的な影響を与え合って，楽しかったり，安心感を持つことができたりするような関係を作ろ

うとしていると考えられる。

クラスタ2は，集団から外れてもいけないし，集団の中で出すぎてもいけない。それでいて，話し合うことも重要であると捉えている。つまり，集団の雰囲気を壊さず留まっていることに努力を傾けているクラスタであると考えられた。このクラスタでは，仲間を道具的に捉えている記述や行動面の共有に注目する記述が多くみられた。このことから，クラスタ2に含まれる調査対象者は，目的や行動を共有していることで得られるメリットを重視しており，その集団の特質を変容させないように心がけていると考えられた。また，コミュニケーションによって，何らかのメリットが得られると捉えていると考えられた。

クラスタ3は，集団から離れた行動を取ることを認め，話し合って納得することを重要視していないことから，個人のしたいようにすることが優先されるクラスタと考えられた。ここでは，仲間に対してあまり強いコミットを感じない記述が多かった。このことから，クラスタ3に含まれる調査対象者は，集団で行動を共にすることが窮屈であるといったような印象を持っていると考えられた。また，そのような集団内で感じられる窮屈さを，話し合い等により集団内で解消するというよりは，無理にその中に留まらず，集団から離れるという選択をすると思われた。

次に，これらのクラスタについて，青年期の友人観と比較してみたい。岡田の一連の研究（1991；1993；1995；1999など）では，伝統的な青年観と対比させて，現代青年の特質が論じられている。そこでは，現代青年の友人関係の特徴として3点が指摘されている。1点目は，相手の考えていることに気を遣う，互いに傷つけないように気を遣うというような「気遣い」に関するものである。2点目は，お互いのプライバシーには入らない，お互いの領分にふみこまないといった「関係回避」に関するものである。3点目は，ウケるようなことをよくする，みんなで一緒にいることが多いというような集団で表面的な面白さを指向している「群れ」である。

これらと本研究で得られた3クラスタと対比させると，クラスタ1では，お互いに情緒的な影響を与え合って，楽しかったり，安心感を持つことができたりするような関係を作ろうとしていると考えられた。これは，楽しさや一緒にいる，という点で，岡田の指摘する「群れ」指向の青年の関係のありようと類似する可能性がある。次にクラスタ2では，目的や行動を共有していることで得られるメリットを重視しており，その集団の特質を変容させないように心がけていると考えられた。この点では，「気遣い」と類似するが，その集団から得られることは言語的なやり取りから得られるもの，コミュニケーションから気付くものであると捉えている点が異なっている。そしてクラスタ3では，集団で行動を共にすることに窮屈であるといったような印象を持っていると考えられた。また，そのような集団内で感じられる窮屈さを，話し合い等により集団内で解消するというよりは，無理にその中に留まらず，集団から離れるという選択をすると思われた。これは，「関係回避」と類似の傾向であるとも考えられる。しかし，過度の影響を回避する得点が特に低かったわけではないことから，関係を回避しつつも友人関係を続けるのか，集団から離れてしまうのか，という点で，岡田の指摘する青年の友人関係とは一致しないといえよう。

まとめと今後の課題

本研究では，集団で過ごす上で重要であることについて調査した。その結果，集団の機能に対応した側面がみられた。それは，積極的に集団を動かそうというよりは，最低限を守るというような消極的なルールであった。また，そのようなルールをどのようなバランスで持っているかによって，3群に分けることができた。この3群は，現代青年の特質から説明されるものもあった。だが，友だちや親友とは異なる仲間関係という集団で過ごすことにより得られるメリットを意識した群もみられた。

以上より，青年期における集団に対する態度には，友人関係とは異なる要素が存在することが示唆された。今後，青年期の集団での関係について，さらに検討する必要があるだろう。

本研究の問題点として，項目収集の時点で「気をつけていること」という教示を用いたため，禁止事項や，どちらかというと消極的な表現が多くなってしまった可能性が指摘できる。集団で過ごす時に，よりポジティヴな経験をするにはどのようにしたらよいかといったアプローチも併せて考える必要があるだろう。今後の課題としたい。

引用文献

土肥聡明　1988　集団と人間（12章）　大坊郁夫（編著）　わたしそしてわれわれ Ver.2 北大路書房　Pp.182-198.

宮下一博　1995　青年期の同世代関係（第6章）　落合良行・楠見　孝（編）　自己への問い直し―青年期（講座　生涯発達心理学　第4巻）　金子書房　Pp.155-184.

落合良行・佐藤有耕　1996　青年期における友達とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究，44，55-

65.
岡田　努　1991　現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究 東京都立大学心理学研究，1，11-18.
岡田　努　1993　現代青年の友人関係に関する考察　青年心理学研究，5，43 - 55.
岡田　努　1995　現代青年の友人関係と自己像・友人像に関する考察　教育心理学研究，43，354-363.
岡田　努　1999　現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について　教育心理学研究，47，432-439.
吉田富二雄　1997　集団と個人（第12章）　堀洋道・山本眞理子・吉田富二雄（編）　新編　社会心理学　福村出版　Pp.205-224.

（2003年９月30日　受稿）

ABSTRACT

The Attitudes toward a Group That Has Concrete Purposes in Adolescence: What Are Adolescents Careful about When Participating in the Group Activities?

Kumiko NAMBA

The aim of this study was to investigate attitude towards a group that has concrete purposes in adolescence. First, 92 adolescents were asked, "what is important to you when you participate in group activities?" based on their responses, a scale of attitudes toward the group was constructed. Second, the scale was administered to 405 adolescents. Factor analysis revealed a three-factor structure. Then, cluster analysis was conducted based on the 3 scores. The results showed that there were 3 different clusters. Cluster 1 had medium scores for "not acting in a self-centered way", high scores for "discussion with other members", and low scores for "not affecting the group too much". Cluster 2 showed high scores for all three factors. Cluster 3 showed low scores for both "not acting in a self-centered way" and "discussion with other members", and medium scores for "not affecting the group too much". The features of the 3 clusters were discussed with regard to descriptions about NAKAMA relationship.

Key words : attitudes toward a group, self-centeredness, discussion, effected on the group.